

# 大衆教育社会と〈自己実現の物語〉

張江洋直・浜島幸司

## ●要約

本稿では、日常生活において存立している信憑性構造に関連づけて、わが国のポスト高度経済成長期における学校教育および教育システムの変容を論じている。ここでいうポスト高度経済成長期は荻谷剛彦が主唱した「大衆教育社会」を中心に、それ以降の時期に重ねられている。

この大衆教育社会の主要な特質とは、学校化社会における大衆的なメリトクラシーおよび大衆的な形式的平等という性向にみることができるが、その時期は概して1974年頃から1990年頃と考えてよい。とはいえ、この時期の後半期である1980年代において、新たな大衆的な性向、すなわち〈自己実現の物語〉が顕著となっている点には十分な留意が必要だろう。特に、1980年代に顕著となるこの性向にはある致命的な欠陥が存する点には止目すべきであろう。それは、この性向を判定する基準が必ず〈結果〉をもってしか可能ではない点である。いい換えれば、この性向を生きている途上においては、むしろ〈結果〉は目標として彼方に存するにすぎないのである。

周知のように、1990年代以降の長引く不況においては、誰もが、それぞれに抱くある程度の希望の範囲内で、こうした〈結果〉を獲得できるわけではない。それゆえ、大衆的に中心的となった〈自己実現の物語〉の性向は、〈結果〉を大衆的には獲得できないのであり、そこで生きる多くの若者たちは〈自己実現アノミー〉という世俗化的な状況を生きざるをえないのである。

## ●キーワード

信憑性構造

物語

ポスト高度経済成長期

学校化

メリトクラシー

平等志向

差別化

世俗化